## 佐久の先人たち㊼

### 宮澤賢治の才能を見い出した童話作家・編集者

# 木内高音

（1896～1951年）

鈴木三重吉が創刊した『赤い鳥』に数多くの童話を執筆するとともに、中央公論社編集者として三重吉の『綴方読本』、豊田正子の作文を集めた『綴方教室』をはじめ、川端康成・久保田万太郎・国分一太郎・坪田譲治・小川未明などの作品を世に送り出した。

## ●鈴木三重吉との出会い

木内高音は、父富之助が鉄道敷設の測量技師の仕事をしていた関係から広島県尾道に生まれる。産声が大きくてこの名がついたという。神戸、小樽と移り住み、一〇歳より父の故郷である北佐久郡志賀村（現佐久市志賀）で過ごし、野沢中学校（現野沢北高校）から早稲田大学英文科へ進む。

一九一三（大正2）年、夏休みで佐久に帰省中に、『国民新聞』に連載中の鈴木三重吉「桑の実」を読み、「私は、たちまち、はげしい三重吉熱にとりつかれ、まだ、そうたくさんはなかった三重吉の著作を買いあさりはじめた」ことにより三重吉宅に出入りし、大学卒業後、赤い鳥社に入社し、三重吉から創作の指導を受ける（『実践国語』第1巻第8号）。

一九一三（大正12）年一一月、三重吉が一九一八年七月に創刊した『赤い鳥』第11巻第4号に「お耳の薬」を発表する。以後、『赤い鳥』が第22巻第3号（一九二九年三月）をもって休刊になるまで、「やんちゃオートバイ」「コージャ物語」「熊と車掌」「水菓子屋の要吉」など三〇編の童話を発表、復刊後の『赤い鳥』にも童話一編とエッセー二編を寄稿した。

「お耳の薬」
（『赤い鳥』第11巻第4号
1923年11月）

三重吉は、木内の作品をめったに褒めなかったが、「人形つくりの話」（第19巻第6号、一九二七年一二月）は、言葉を尽して褒めたという。

## ●宮沢賢治の才能を最初に見いだす

『赤い鳥』に作品の掲載を希望した宮澤賢治は、一九二一年頃に上京し、三重吉と面会した。三重吉は「たしかに、変っていて、面白いことは、面白い。しかし、子供のよみものとしては、『赤い鳥』には、向かない」と、直接賢治に伝えたという（『赤い鳥代表作集3』）。また、「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった」に対しては、賢治と同郷で、賢治と三重吉を仲介した菊池武雄に、「おれは忠君愛国派だからな、あんな原稿はロシアにでも持っていくんだなあ」と述べた。

しかし、木内は、賢治の作品を評価した。編集会議における木内の評価を耳にした菊池は、「東京人ではじめて賢治童話を認めた」人物として、「その名を忘れることができなかった」という（『年譜宮澤賢治伝』）。

賢治の作品が『赤い鳥』に掲載されることはなかったが、一九二四年一二月に自費出版に近い形で出版された『注文の多い料理店』（挿し絵と装丁は菊池が担当）の広告は、『赤い鳥』に無料で掲載されることになり、三重吉の指示で木内が広告を担当した。『赤い鳥』第14巻第1号（一九二五年一月）には、「読む人の心を完全に惹きつけねばおかぬ真面目さと自信を以て」という小見出しと、「東北の曠野を走る／素晴らしい快遊船（ヨット）だ！」という内容の広告が掲載された。

『赤い鳥』第12巻第3号
（鈴木三重吉追悼号）
木内の童話・追悼文・赤い鳥の歴史が掲載されている
（1936年10月）

## ●木内の苦悩―望みは作家

木内は一九二九（昭和4）年七月、中央公論社に入社し、出版部長を経て、雑誌『婦人公論』の編集長となる。この間、三重吉『綴方読本』（一九三五年）、『赤い鳥』に掲載された豊田正子の作文を集めた大木顕一郎・清水幸吉『綴方教室』（一九三七年）をはじめ、川端康成『級長の探偵』・久保田万太郎『一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと』・塚原健二郎『子ども図書館』・国分一太郎『戦地の子供』・坪田譲治『ビハの実』・小川未明『雪来る前の高原の話』などの名著を、次々と世に送るなど、名編集者としての名声を得た。

しかし、一九三三年一月、中央公論社に入社し、編集部に配属された藤田圭雄は、木内の想いを次のように述べている。

何事にも一見識持った、うるさ型の正義派であり、同時に気の弱い、小心なところもあった。ジャーナリスト的なところはほとんどなく、社にあっても、出版部で、こつこつと美しい本を作り上げているという存在だった。

酒席での木内さんは悲しかった。文句をいいながら、姿勢を正して気取ってのんでいる間はたのしい。ところがある量をすごすと、変って来た。そこにあるのは自棄と絶望である。木内さんの本来の望みは作家であることだった。現在の境遇にあっても、心がけ一つでは作品活動も不可能ではない。しかしそこへ踏み切れない自分の怠慢と臆病に腹が立つのだ。木内さんの高い鑑賞眼からすれば、自分よりずっと腕の下の者が、どしどしと世に出て行く。そうしたものに対する嫉みと怒りが木内さんの酒を哀しいものしていた。

（『日本児童文学』第13巻第3号）

木内の「本来の望みは作家である」ことがうかがえる。

## ●故郷佐久への想い

戦後は、日本新聞協会に勤めるかたわら、『赤とんぼ』（実業之日本社）、『銀河』（新潮社）、『少年少女』（中央公論社）、『子供の広場』・『少年少女の広場』（新世界社）、『童話教室』（桐書房）、『子どもの村』（新世界社）に童話や小説を精力的に執筆した。また、『建設列車』（川流堂書店）、『やんちゃオートバイ』（中央公論社）、『スフィンクス物語』（明日香書房）、『無人島の少年』（小峰書店）などの童話単行本も出版した。

『やんちゃオートバイ』
中央公論社1949年

未刊のままで終わった短編の連作『佐久の地図』は、「寒雀」・「送別会」（『赤とんぼ』）、「痛快」（『日本児童文学』）、「佐久の地図―テニスと古海先生」（『白象』）と藤田圭雄が保存する生原稿「佐久の地図―連合マッチのあとさき」からなり、中学生時代を過ごした佐久での寄宿舎生活を中心に、生母との死別、義母への反発、父や友人のこと、そして雄大な故郷佐久の風物が描かれている。木内は出版の希望をもっていたといわれるが、かなわなかった。

（伊藤純郎）

○参考文献
与田準一ほか編『赤い鳥代表作集3』小峰書店　一九七五
長野県野沢北高等学校記念誌編集委員会編
『高原の日は輝けり　野沢中・北高史』　一九八八
堀尾青史『年譜　宮澤賢治伝』中公文庫　一九九一
和田登『民話の森・童話の王国』オフィスエム　二〇〇二